

◆（瀧上陽一君） ありがとうございます。

引き続き、さらなる交通安全の確保並びに渋滞緩和に御尽力を賜りますようよろしくお願いをいたします。

次にお尋ねいたしますのは、郡部の公的医療機関における医師不足の問題とその対策についてでございます。

本件に関しては、昨年6月議会において鬼海洋一議員が、また、一昨日は氷室雄一郎議員が質問され、健康福祉部長よりその対策に関する御答弁をいただいたところでございます。

しかしながら、ことしになりましても、郡部の公立病院においては、改善の兆しは見られず、逆に事態は悪化する一方であります。

報道によれば、牛深市民病院の内科常勤医4人全員が辞表を提出、4月以降内科の診療ができなくなるおそれが出てきた、熊本こころの医療センターでは、常勤医4人の退職により、4月以降老人治療病棟を休止するために、入院患者を民間病院に転院させる、玉名中央病院においては、麻酔医がいなくなるため、4月から外科手術ができなくなるなどと、人の命を預かる医療の世界のこととは思えない極めて異常な事態が相次いでおります。

舛添厚生労働大臣が、地方の医師不足は緊急事態を宣言しないとイケないような状況だと言われたように、一般内科や老人医療においてまでこうしたゆゆしい状況が生じるといふことは、健康保険制度のもとで保障されてきた国民のひとしく医療を受ける権利が損なわれ始めていると感じざるを得ません。

県を初め関係機関の御努力にもかかわらず、状況が悪化の一途をたどる中で、医師確保にどう取り組んでいかれるのか、さきの3つの病院の例も踏まえながら、お答えをいただきたいと存じます。

また、ただいまの問題に加え、産科、小児科の医師不足も深刻さを増すばかりであることは御承知のとおりでございます。

私の地元の山鹿市立病院におきましても、昨年7月から、常勤の小児科医が不在となったため入院や救急対応ができず、小さなお子さんをお持ちの御家庭では、大変不安な日々を過ごしておられます。

その一方で、昨年末、県が現在策定中の第5次保健医療計画の中で、県下を4つの小児医療圏に分けた上で、それぞれに重点化施設と強化施設を配置するとの報道がなされ、山鹿市民の間に動揺が広がりました。

この問題は、山鹿市のみならず、郡部に共通する極めて深刻かつ緊急の問題であります。その改善のために第一にとられるべき施策は、常勤小児科医が不在の病院、地域を早急になくすことではないのでしょうか。保健医療計画の検討内容を踏まえ、お考えをお聞かせ願います。

以上2点について、健康福祉部長にお伺いいたします。

〔健康福祉部長岩下直昭君登壇〕

平成20年 2月 定例会 - 02月22日 - 04号 - P.135

◎健康福祉部長（岩下直昭君） 医師不足問題についてのお尋ねでございます。

全国的な医師不足は、新たな医師臨床研修制度によりまして研修医の大学離れが進んで、大学の医師派遣調整機能が低下していることが大きな要因というふうに言われております。また、小児科や産科、そして救急医療の現場での勤務医の過重労働、さらには、若い層で女性医師が増加いたしておりますが、勤務環境の問題などで30代半ばで離職する場合がありますなど、医師不足にはさまざまな要因がございます。

昨年、県内の公的病院22カ所を訪問調査いたしましたが、すべての病院が医師不足を訴えますなど、地域の医師不足は深刻な状況でございます。

県では、今年度から、医師の確保について検討をいたします医療対策協議会の設置、それから女性医師の就業支援、さらにドクターバンクの設立など、各種の対策に着手をいたしております。また、今回の牛深市民病院等の医師不足問題を踏まえまして、改めて県内の医師不足の現状把握に努めますとともに、地域の病院間の連携に向けた調整を図っていきたくと考えております。

また、各方面から医師不足の原因として改善が求められております臨床研修制度や産科、小児科の診療報酬の重点評価など、国において対策が必要な事項につきましては、引き続き全国知事会等を通じ国へ働きかけていくことといたしております。

次に、常勤小児科医の確保についてでございますが、地域の病院から小児科医がいなくなる事態も生じておりますが、小児科医の絶対数が不足いたしておりますして、直ちに確保するのは非常に難しい状況でございます。

そこで、県といたしましては、新たに県内を、熊本中央、県北、県南、天草、この4つの小児医療圏に分けまして、24時間の診療体制が未整備の県北、県南地域につきましては小児医療体制検討会議を設置いたしまして、対応策を検討いたしているところでございます。

この検討会議におきましては、圏域内の病院の小児科を集約化、重点化することも念頭に置きまして、また、それぞれの診療所の医師の協力もいただきまして、休日・夜間診療体制の整備等も含め、地域の実情に応じた診療体制の構築を議論いただいているところでございます。

また、地域の内科医に対しまして、夜間の小児診療に協力いただくための研修事業の実施、それから子供の急病に対する不安解消に有効であります小児救急電話相談事業、いわゆるシャープ8000でございますが、それに加えまして、さらには、新たに熊本赤十字病院でも取り込まれるようになりました診療所の医師による診療体制の支援協力など、小児科医の不足を補完する取り組みを推進しながら小児医療体制の充実に努めてまいります。

〔淵上陽一君登壇〕